社会科事例１　「単元を貫く問い」を意識した実践事例

単元名　「律令国家の形成と摂関政治」

～古代日本の各時代の文化は，何が変化させたのか～

歴史的分野　Ｂ 近世までの日本とアジア　（１）古代までの日本

１　単元の目標

・我が国の古代の歴史の大きな流れを，東アジアの歴史を背景に，各時代の特色を踏まえて理解するとともに，諸資料から歴史に関する様々な情報を効果的に調べまとめる技能を身に付けるようにする。

・日本の古代の歴史に関わる事象の意味や意義，伝統と文化の特色などを，時期や時代，推移，比較，相互の関連や現在とのつながりなどに着目して多面的・多角的に考察したり，歴史に見られる課題を把握し複数の立場や意見を踏まえて公正に選択・判断したりする力，思考・判断したことを説明したり，それらを基に議論したりする力を養う。

・日本の古代の歴史に関わる諸事象について，よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究，解決しようとする態度を養う。

２　単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・律令国家の確立に至るまでの過程，摂関政治などを基に，東アジアの文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ，その後，天皇や貴族による政治が展開したことを理解している。 ・仏教の伝来とその影響，仮名文字の成立などを基に，国際的な要素をもった文化が栄え，それらを基礎としながら文化の国風化が進んだことを理解している。	・古代文明や宗教が起こった場所や環境，農耕の広まりや生産技術の発展，東アジアとの接触や交流と政治や文化の変化などに着目して，事象を相互に関連付けるなどして，アの（ア）から（エ）までについて古代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し，表現している。 ・古代までの日本を大観して，時代の特色を多面的・多角的に考察し，表現している。	・日本古代の文化について，東アジアの変化と日本の政治の変化の両面から考察し，そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

３　単元について

本単元では，古代の日本の大陸の変化による外圧や日本の内政の変化を，文化の変化と関連付けながら，古代を大観することを目的としている。各時間では，最初に飛鳥・奈良・平安の文化の特徴をつかみ，前の時代との比較をする中で，文化の変化をつかむ。そして，その時代の出来事を学ぶ中で，政治や社会の変化と文化の変化のつながりを見つけたい。

４　指導と評価の計画

○「評定に用いる評価」　●「学習改善につなげる評価」

次	◇ねらい・学習活動等	評価の観点			評価規準（評価方法）
		知	思	態	
単元の導	**【ねらい】単元を貫く問い「古代日本の各時代の文化は、何が変化させたのか。」について、飛鳥文化や天平文化，国風文化の共通点と相違点を考え，単元を貫く問いに対する仮説を立て，課題解決への見通しを持つ。** ポイント①				

入 1 時間	◇（学習活動の概要）現代の文化の変化から，文化の変化に与える社会の影響を知り，グループでの対話的な学習の中で，飛鳥文化や天平文化，国風文化の共通点と相違点を考えさせ，文化の変化をとらえ，仮説を設定し，課題解決への見通しを立てる。				●文化の共通点・相違点に着目し，仮説を立てている。（学びの地図）
第一次 2 時間	**【ねらい】東アジアの統一王朝の形成が日本の政治にもたらした影響を理解させ，飛鳥文化の形成に与えた影響を考察する。** **【第一次の問い】飛鳥文化に，寺院や仏像が見られるのはなぜだろう。**				
	◇中国で統一王朝が形成・律令による政治制度や国際色のある文化が発展・世界各地の交流の隆盛によって，仏教文化が形成され，東アジアの国々に広まっていったことを理解する。	●			●中国での統一王朝の形成が，東アジアの国々に与えた影響について理解している。（学びの地図）
	◇冠位十二階と十七条の憲法を基に理解し，仏教を重んじた理由を考察する。また，導入時に立てた仮説を見直し，再構成する。	○	●	●	●飛鳥文化について，東アジアと日本の政治の変化の両面から考察し，表現している。（学びの地図） ●仮説を再検討し，海外と政治の視点を基に再構成している。（学びの地図）
第二次 3 時間	**【ねらい】日本の律令国家の形成によって，天皇を中心とする中央集権国家が形成されたことを理解させ，仏教による鎮護国家の考えの下，寺院が全国へ広まった過程を理解する。また，日本の律令国家の形成と仏教の広がりが，天平文化に与えた影響を考察する。** **【第二次の問い】天平文化の特徴はなぜ，生まれたのだろう。**				
	◇大和政権の大王から，天皇を中心とする中央集権国家が形成されたことを理解する。	●			●律令の導入による変化から天皇中心の中央集権国家が形成されたことを理解している。（学びの地図）
	◇奈良時代には日本が積極的に唐の文化を取り入れたことを理解するとともに，積極的な仏教文化の受容が行われ，天平文化が栄えたことを考察する。	●	○		○天平文化が広まったことを考察している。（学びの地図）
	◇民衆からの税や労役によって律令制が維持されたことを理解するとともに，公地公民が崩れていったことを理解する。	○			●律令制が民衆からの税によって維持されたこと・墾田永年私財法によって貴族や寺院が強大化したことを理解している。（学びの地図）
第三次 3 時	**【ねらい】平安時代になり，藤原氏を中心とする摂関政治が展開したことを踏まえ，その理由を外戚関係の構築，荘園の拡大，平安京への遷都の複数の視点から考察する。また，国風文化のおおまかな内容を理解し，国風文化が「日本風」となった理由を，社会の変化やこれまでの学習から自由に考察し，表現する。** **【第三次の問い】国風文化はなぜ，「日本風」になったのだろうか。**				

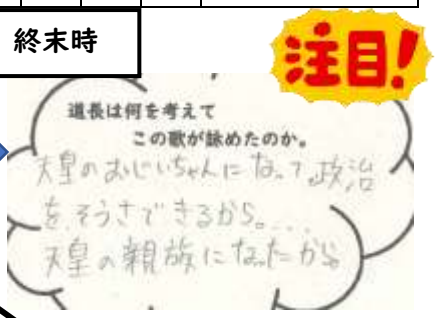
間 ※2時間目・本時	◇桓武天皇が平安京に遷都を行い，奈良時代からの寺院の影響力が衰えたことを理解させる。 ◇荘園の拡大による貴族の影響力の増大と，外戚関係の構築による藤原氏の台頭を関連付けて考察させる。 ◇唐風が重んじられた時代から，国風（日本風）へと変化した過程をとらえ，その理由を考察する。	● ○	●	●	●荘園が拡大し貴族の影響力が増大したことを理解している。（ノート） ●藤原氏が最高権力者となった理由を，多面的・多角的な視点から考察している。（学びの地図） ●国風文化が「日本風」となった理由を，社会の変化などから考察し，表現している。（学びの地図）
単元のまとめ 1時間	**【単元のまとめのねらい】単元を貫く問いに戻り，これまでの学習を踏まえて，古代日本の文化の変化を東アジアと日本の律令制の導入やその変化の両面から考察し，まとめ，表現する。** **【単元を貫く問い】古代日本の各時代における文化の変化の原因は何だろうか。** ◇ここまでの学習を踏まえて，古代日本の文化の変化の原因を，東アジアの変化と，日本の律令制の導入やその変容などの政治の変化の両面から考察する。		○ ポイント2	○	○多面的・多角的に考察し，表現している。（学びの地図） ○導入時に立てた仮説と単元の答えを比較しながら，次の学習へどう生かすかを考えている。（学びの地図）

5　本時の展開　　○「評定に用いる評価」　●「学習改善につなげる評価」　ポイント3

	☆ねらい・◇学習活動等	指導上の留意点	評価の観点			評価規準（評価方法）
			知	思	態	
導入	☆藤原氏が力をもつ政治に変わったことをつかむ。 ◇藤原道長が詠んだ「この世をば・・・」の和歌を読み，藤原道長という人物について確認する。 ◇学習課題を提示する。	◇藤原氏が政治の中心となり，天皇中心の政治から藤原氏が実権を握る政治になったことをつかむようにする。			●	●藤原氏が政治の実権を握ったことをつかんでいる。
学習課題：**藤原道長が「この世をば・・・」の歌を詠んだのはなぜか。道長の気持ちになって考えよう。**						
展開	**☆藤原氏が政治の実権を握ることができた理由を考察する。** ◇「藤原道長が最盛期」と言われる。それは，なぜだろうか。「この世をば・・・」の句を詠んだ心情を，家系図から考えてみよう。	◇藤原氏の家系図を見ながら，外戚関係を築いたことを理解する。 ◇「外戚関係」を掘り下げる。外祖父となった天皇の即位が続いたことを読み取る。		●		●「このよをば・・・」の句を詠んだ道長の心情を表現している。
まとめ	**☆藤原氏が最高権力者となることができた理由を資料から考察し，表現している。**	◇藤原氏が実権を握ることができた理由について，「外戚関係の構築」のキーワード		●		●藤原氏が実権を握ることができた理由を

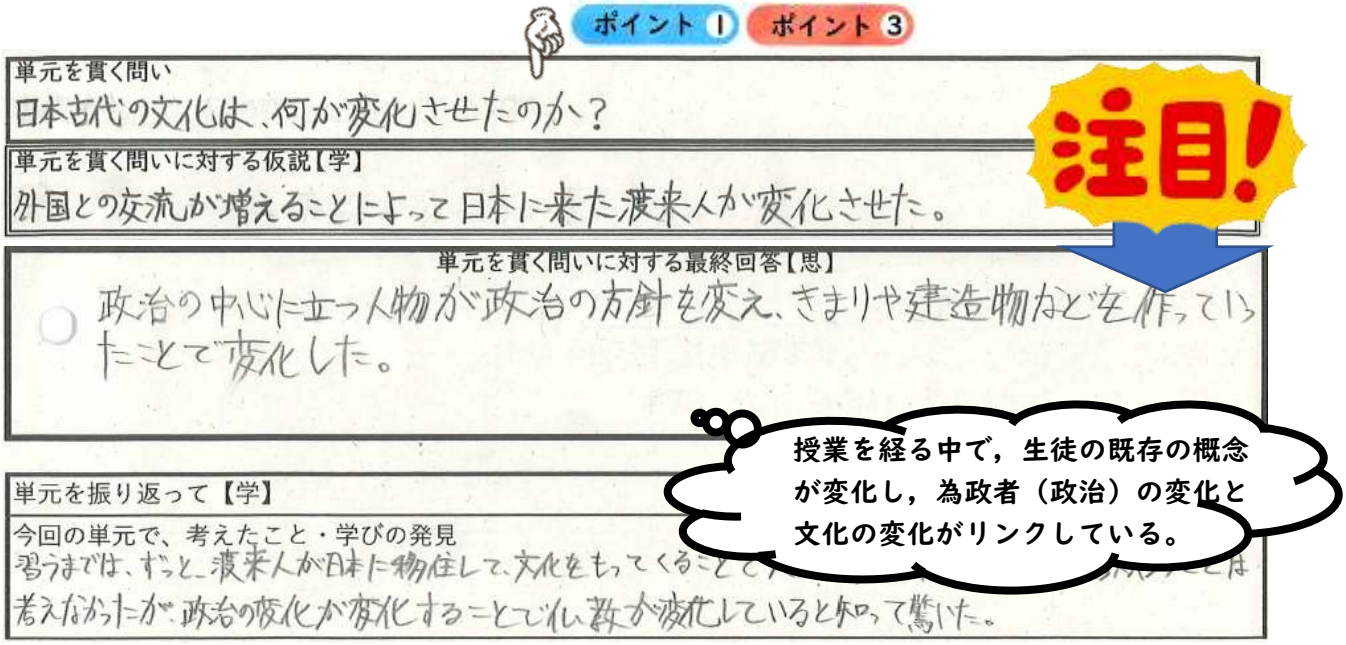
	◇なぜ，藤原氏が摂関家となることができたのだろう。これまでの授業から考察し，まとめてみよう。	の中から説明できるようにする。				多面的・多角的に考察し，表現している。

6　指導と評価の一体化に向けて（授業改善のポイント）



道長の権力の源が「外戚関係の構築」にあることを理解している。

本授業では，藤原氏が最高権力者となった理由を「資料から考えること」を目的に行った。家系図の資料から天皇と娘との婚姻とそこから生まれる後嗣（藤原氏から見たら孫）が天皇に即位することによって最高権力者になる。この過程を生徒たちの話合いから考えたことによって，「天皇のおじいちゃんになるとなぜ，権力が握れるのか。」「藤原氏の娘ばかりがなぜ，天皇と結婚できるのか。」といった疑問が出た。話合いの中で，これらの疑問に対しても意見が出ることで，外戚関係を中心に歴史を考察する場面も見られた。生徒たちの歴史認識が深まり，広がった場面だととらえられる。



授業を経る中で，生徒の既存の概念が変化し，為政者（政治）の変化と文化の変化がリンクしている。

上記の生徒は，海外の変化と政治の変化の両面ではないが，導入時の考えから変化している。思考が深まり，政治と文化を関連させて考えることができるようになったが，海外との関わりなど多角的に考える面が強調できていなかった。

7　まとめ

計画性をもった指導が求められる。単元の中で，資料の読み取りの技能や多面的・多角的に考察する力など，生徒に身に付けさせたい力を念頭に置き，段階を踏んだ指導を心掛ける必要がある。今回の実践は，「多面的・多角的な視点をもって考察する」ことを目的とし，行った。はじめは，考察してまとめることに難しさを感じていた生徒も，歴史的事象を多角的に見る視点をアドバイスすることによって，的確にまとめることができるようになった。